1

スマホがある限り、俺は常に誰かの目にさらされている。ものの例えではない。俺だけでなくみんながスマホを使っている。それだから事あるごとに誰かがメッセージを送り、出来事を共有し、意見を好き勝手に書き込む。嫌なら見るな、という解決策もあるが限度があるだろう。事実、今日のお昼をどの店で食べるのか、多くの人はサイトのレビューを見て決める。かく言う俺もそのうちの一人だ。もはや起きている時間全てにおいて、他人を意識している。自分が常に多数派に所属できるような努力を欠かしたことはない。高校生がクラスで浮くなんてことはあってはならない。

「なあ、あのアニメ見た？」

「見た見た」

教室に入ると、既に登校していた友人たちが談笑していた。話題になっているアニメは特に好みではないが、流行っているからチェックしている。仲間内の会話に流れるように入る。やれキャラクターがどうだの、ストーリーがどうだのといった世間一般の意見もリサーチ済みだ。暗記したものをアウトプットするという点でテストと何ら変わらない。毎日のように実施される会話の試験を乗り越えて、放課後、帰宅するとすぐに悠人の部屋へ向かう。

「悠人、ただいま」

ドアを開けて声をかける。

「ん、早く閉めて」

はいはい分かってるよ、と顔に出しながら部屋に入るなりすぐに扉を閉める。弟の悠人は日にあたれない病気のため、常に自室から動くことができない。弟の皮膚は、日光にやられた箇所の再生が気の遠くなるほど遅い。

「今日は夏至なんだって」

「そう言えばそうか。気が付かなかった」

「昼が一番長い日なんでしょ」

振られた話題は意外だった。外に出ることができない悠人に、夏至の実感が湧くはずもないと思っていたが、間違いだったようだ。悠人なりに、季節の移ろいを感じて、楽しんでくれているならいい。

「昼が長いって、どんな感じ？」

「どんなって言われてもな」

昼があって、夜があるのは俺にとって当たり前過ぎて、多少どちらかが長くても気になることはない。しかし、昼という時間を時計の文字盤でしか感じることができない悠人は、その時間に何か特別な憧れを抱いている。

「みんなが羨ましいよ。太陽の下で大手を振って生きていけるんだ。俺はカーテンの内側で、ひっそりやっているのにさ」

「えらく感傷的だけど、何かあったのか？」

「ＳＮＳ見てたらさ、もうすぐ夏休みなんだよ。大学生なんかは、もうとっくにバカンスを楽しんでるんだ」

悠人にまで、相互監視の魔の手が迫っていた。

まもなく世間は夏休みに突入するという実感は、悠人だけでなく俺も憂鬱にさせた。暇な時間が多くなると、誰もが自分を着飾り、輝かしい日常を装う。そうしなければ、その人の人生は充実していないと判断され、生存に支障をきたす。しかしその前に、期末テストを乗り越えなければならない。普段の授業は人並みに真面目に聞いているから、それなりに自信はある。しかし、万が一この自信に見合わないほど低い点数を取ってしまうかもしれない。それを見越して、いつも俺はある準備をしておく。

「俺、全然勉強してないわ」

テスト当日、流れるように友達に言った。低い点数を取ったときのための保険をかけた。結局、結果は喜ばしいものだったので、いらぬ保険ではあったが。テスト返却のとき、俺は少し自慢げに

「いや、意外といけたわ」

とこぼした。特にいつもと変わらない会話だと思ったのだが、その日は違った。友人はため息をつき

「お前さあ」

とわざとらしく言うと、続けた。
「そういうのやめてよ。本当はできるのに、自分できませんよって謎アピール。謙遜超えて、卑屈だよ。ウザい」
ウザい。その一言がずっと俺の中で反響した。今まで波風立てないように上手くやってきたつもりだったのに、失敗していたことに気が付かなかった。そして、険悪な関係を修正できないまま、夏休みに突入した。

「それで、その後どうなったのさ」
俺は悠人にことの顛末を話した。
「そのまま、進展無しだよ」
うーん、と唸って悠人が口を開いた。
「バカにされたくないから、自分の実力を低く見積もるのは分かる。でもやり過ぎると良くない。これ、兄さんの友達が正しいよ。俺だってやられたらウザいもん。っていうか、何で俺の前だとそうゆうことしないのにやっちゃうわけ？」
「いや、それは、やっぱりバカにされたくないから」
はあ、と悠人がため息をついた。
「そんなに友達が自分のことを見下してくるように思う？」

「思わないけど、念には念を入れて」

確かに悠人に対しては本音しか言っていないなと振り返る。俺が黒と思ったら黒と言うし、白と思うなら白と言う。家族だからか、と思ったけど違った。俺は親に言えないことも悠人になら言えた。俺は悠人のことをここまで信頼していたのかと関心すら湧く。いつから、弟の存在がこんなに大きなものになっていたのだろうか。

「兄さんは昔は、そんなんじゃなかった。もう少し、自信があったっていうか」

昔のことを少し振り返ってみる。自信満々で望んだのに、上手くいかなかったテスト。練習ではタイムは上々だったのに、本番でこけて最下位になったリレー。俺は失敗が怖くなっているのではないのだろうか。悠人は、失敗したことがないからあんなことが言えるのだろう。俺の気も知らないで。

「お前はいいよな。何もしなくてもいいんだから」

「別に、良くないよ。だって、誰も何も言ってくれないんだもん」

「それがいいんじゃないか。恥ずかしかったり、惨めな思いをしないでいいんだ」

「兄さん、それじゃ多分いけないよ」

一体何がいけないのか。というか、悠人に何が分かる。日中はまともに外に出れないお前に、一般人を語る資格はない。声に出そうになったが流石に理性が止めた。こんなことを言えるほど、俺も偉くない。

「もう裏アカを作れば？」

半ば投げやりな提案だったが、意外と悪くなさそうに思えた。

「ここには、僕しかいないから、ここで失敗するのに慣らしていったら？リハビリみたいな感じで」

少なくとも、この遮光カーテンで仕切られた日影は誰の目に触れることもなく、ここならいくら失敗してもいいかなと思えた。